平將門伝説が残る取手市岡

岡堰(おかせき)、寛永７年(1630)、関東郡代伊奈半十郎忠治によって開発された岡堰は、明治 19 年に始めて新式の水門を持つ堰となったが、翌年の大洪水で壊され、明治 31～32 年、総工 64,219 円余をかけて大改築された。
その後、昭和 12～21 年につくられた水門と 28～35 年の工事で出来た洗堰があったが、現在のものは平成８年 11 月に完成した。小貝川の水源は栃木県那須烏山市曲畑(旧大赤根)の小貝ヶ池にあり、栃木県市貝、益子、真岡、茨城県下妻、常総、つくば、つくばみらい、守谷、取手、竜ケ崎、利根の市町村を経て利根川に合流している。
つくばみらい市谷和原に福岡堰が、竜ヶ崎市に豊田堰があり『関東三大堰』と呼ばれる。河中の平地は堰を止めた時の遊水地になっています。下記地図は、岡村落全域を示しています。

① **中之島公園**、昭和 30 年代に立てられた水門の一部が残されました、また間宮林蔵の銅像があります。

間宮林蔵は、北海道の北にある、樺太が大陸と地続きの半島なのか、島なのかを調査に行く。

安永 9 年(1780)－天保 15 年 2 月 26 日(1844/04/13)、江戸時代後期の隠密、探検家でした、近藤重蔵、平山行蔵と共に「文政の三蔵」と呼ばれました。名は倫宗（ともむね)。農民出身で幕府隠密をつとめた役人でした。

筑波郡上平柳村(後の茨城県筑波郡伊奈町、現在はつくばみらい市)の農民の子に生まれる。

当時幕府は利根川東遷事業を行っており、林蔵の生まれた近くの岡堰の普請を行っていました。当然、地理学や数学を学んだ林蔵は、この事業に借り出されました。

後に蝦夷の旅に出て、幕府から禁止されていたロシアに渡り、シベリアの当時の町や人々に国境の所在を調査しますが、樺太は島であることを突きとめ「間宮海峡」と名づけたのでした。現在はロシアの領土と主張されていますが、地図帳では国別色は、白であり無国籍を意味した日本地図となっています。国後や積丹と同じく略奪された、日本の国土です。

② **水神岬公園**、

水神宮の奇異な亀像と宝塔。

さくら荘という名にふさわしく、桜の花見時はライトアップもされ、花見の名所、更に大日山の岡神社の桜も十数本が咲き乱れますが、知る人がいないため、独り占めの花見が出来るかもしれません。

水神岬は岡堰にある約 100m の突堤で、中洲などとともに水流をジグザグにし、堤防を護る役割をしている。水神宮が祭られた祠の奥に徳川家達(いえさと、文久3年(1863)～昭和 15 年(1940)は、徳川宗家 16 代当主)公豪額の岡堰築造之稗(大正8年)がある。

岡堰は古来、景勝地としてされてきましたが、とくに、明治 32 年、煉瓦造りに改築してからは、赤茶色の明治的西洋風の構造物が青色の水に影を落とし、周囲の樹木の緑に映えて、一層その名が高くなりました。

それ以前の明治 19 年 4 月 3 日、北白川能久親王殿下が岡堰を巡覧されてその風光を称賛され、桜樹植付料を賜ったので、当時の郡長・広瀬誠一郎が堤防上に植樹して以来、一躍、桜の名所として名を馳せました。

毎春、花の咲くころは、数千人の花見客で賑わい、サーカス小屋も張られたほど。

しかし、昭和 28 年以降、堰が全面改修され、名物の桜も姿を消し、その一部が残るのみですが、今でも春にはたくさんの人が訪れて桜の花見を楽しんでいます。

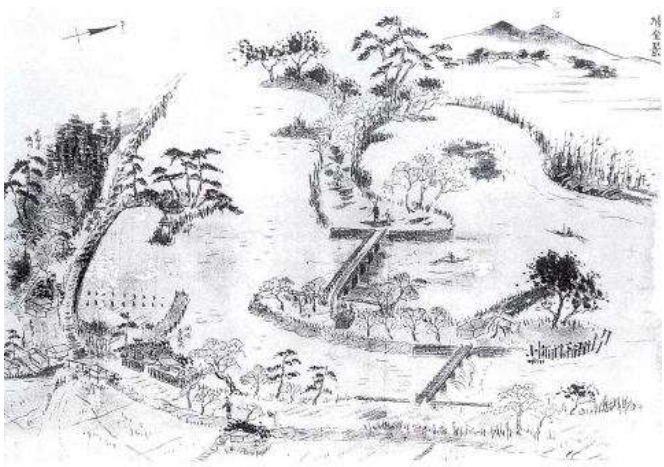
岡堰用水組合では水神宮の祭りのときに上州榛名神社へ代参を立てていた事が江戸時代の記録に残っている。群馬県榛名湖の榛名神社を水源の神としていた。

③ **老人保険センターさくら荘**、さくらで有名な公園が隣接しています。

桜の名所。見晴台から岡堰と小貝川の遊水地、相馬二万石と川向こうの谷和原三万石の美田が一望出来る。

すぐ下にキリンビール取手工場の取水場があり、堤防の向うに水神岬公園と岡堰の水景色が広がります。

桔梗田の説明看板と、相野谷川沿いの桔梗田(沼)の跡



赤松資次郎画伯が描いた明治 32 年以降の岡堰全景

相馬二万石の水源、岡堰と用水

冬に水門を閉じ、田植えが始まると水門を開き用水からの水は稲田を潤しました。
「岡堰農業用水路」は現在でも、昔と変わらない姿で残り、「こしひかり」を生産している。
だが、小貝川の下流地域は河川の蛇行が多いために、大正・昭和時代は土手の決壊による水難事故が頻発する所として、牛久沼から流れる八間堤との合流からの下流でもっとも多発し、その様子は全国に知られる時代が戦後まで続きました。
裏郷用水幹線は、山王村の二三成橋下流から取水して、この地図と様子が変わっている処があります。

親王山地蔵院延命寺

平將門軍勢一門の祈願寺といわれている真言宗の寺で本尊は延命地蔵菩薩。弘法大師 1150 年大遠忌記念事業として山門、鐘楼を再建した。大師堂は 1996 年 7 月の落慶で、かつての藤代弘信講の札所。鐘楼は、以前は田が一望出来る川沿いにあり人々に出水を伝えた。寺域に將門の愛馬を葬ったという［駒形古墳」(円墳)がある。

將門と延命寺の縁起、

第 74 代鳥羽天皇の御宇(1107～1123)紀州国那賀郡根来(ねごろ)に覚鑁(かくばん)上人という高僧がいた。
夢で「自分は下総国相馬郡岡村の地蔵である。その昔滝口小次郎相馬將門は自分を何時も祈願し、朝晩に供養を受けた。しかしながら將門は前世の宿縁から朝廷に謀反を起し、逆族となり敵の矢に当って死んだ。
貴僧も將門ゆかりの人である。急ぎ関東に下って一寺を建立すれば將門ゆかりのものはいうに及ばず、無縁の衆生まで救われるであろう」とお告げがあった。上人は不思議なことと思ったがその時はそのままにしていた。
十数年経った長承 3 年(1134)正月 21 日の夜子の刻、再び同じお告げがあり、上人は東国へ下る決心をして旅立った。
方々訪ね歩いたが分からない。ある夜山王の地に到り草庵に宿を取ったところ、夜半になって山の麓が光っていた。
奇異に思い庵主とともに辿って行くと、周りに堀があり、草木が生い茂った島に塚があった。
庵主がいうには「この地に將門の霊廟があった」とのこと。上人が草を分けて入られたところ、中から一体の地蔵菩薩が見付かった。上人はその場所を「仏島山(ぶっとうざん)」と名付け、翌年の保延元年(1135)一寺を建立し、親王山延命寺と名付け、庵主の覚如を一世と定めて根来に帰られた。
延命寺はその後小貝川河畔の台地(現在地)に移転し、仏島山は古墳になっている。

延命寺の太子堂

現在の延命寺附近で將門軍と藤原秀郷軍の戦が行われたと云う。
秀郷軍は寺原方面から攻めて来て、その中には寺原付近の地元民も入っていた。延命寺が太子堂を建立するにあたり岡の人々が寺原の人々に呼びかけたが、当時の合戦の「しこり」から応じなかったという。

④ **岡村落中心部、岡不知**(おかしらず)、薬師堂

岡一帯の山は上人が夢に見た場所をなかなか見つけられなかったので、「岡不知」と呼ばれている。
「不知」は、「ふち」と読むが　「＊＊不知」のように、「＊＊知らず」とも読みます。
意味は、知らないこと、知恵のないこと、かしこくないこと、「不知案内」と辞書には記載されています。
更に「＊＊不知」には、千葉県市川市の藪不知と新潟県の親不知子不知の有名な所があります。
不思議なことに、藪不知では平貞盛、親不知では平頼盛、岡不知では平將門と、平家が共通して登場します。
「藤代町合併 50 周年記念誌」では、岡不知を「地元の人でも道に迷うほど、草木の茂る山」と説明しています。
富士の樹海ではあるまいし、たかが海抜 10m程で、広さも上野不忍池程度の林で、どうすれば道に迷うのでしょうか。あきらかに「不知」の解釈が間違えているとしか思えません。

千葉県と新潟県に残る、「藪不知」と「親不知子不知」を紹介して、「岡不知」を推察してみたいと思います。

千葉県市川市の藪不知の場合

千葉県市川市役所の前にある「八幡不知森(やわたしらずのもり)」は、藪不知(やぶしらず)として全国に知られた名所の一つです。この藪不知には古来多くの話が伝えられていますが、中でも次の話は有名です。
それは天慶(てんぎょう、將門)の乱の時、平貞盛がこの地に「八門遁甲(はちもんとんこう、陰陽道に基づいた呪術の一種、占いとは違います)の陣」を敷いたが死門の一角を残すので、この地に入るものには必ず祟りがあるとの言い伝えがありました。

後にこの話を聞いた徳川光圀は「馬鹿げた話」と藪に入ったところ、果たせるかな白髪の老人が現れ
「戒めを破って入るとは何事か、汝は貴人であるから罪は許すが、以後戒めを破ってはならぬ」と老人の怒りを被ったといいます。この他「藪不知」については、この地が行徳の入会地(いりあいち)であり、八幡の住民はみだりに入ることが許されず、そのため「八幡不知」と言われたのが藪不知になったともいいます。

新潟県糸魚川市の親不知、子不知の場合

一説では、断崖と波が険しいため「親は子を、子は親を省みることができない程に険しい道」である事から、とされているが、以下のような伝説もあります。
寿永４年(1185)の壇ノ浦の戦い後に助命された平頼盛は、越後国蒲原郡五百刈村(現在の新潟県長岡市)で落人として暮らしていた。このことを聞きつけた奥方は、京都から越後国を目指してこの難所に差し掛かった。
しかし、難所を越える際に、連れていた子供が波にさらわれてしまい、次の歌を詠んだとされている。

「親知らず、子はこの浦の波枕、越路の磯の泡と消え行く」　母親の悲しみに心打たれます。

以後、その子供がさらわれた浦を「親不知」と呼ぶようになった。

「岡不知(おかしらず)」の由来と「古墳のたたり」。

藤代の不知は「岡」から始まります、縄文時代のこの地方は香取灘という海であり、岡は唯一の陸地でした。
AD200 年頃の、弥生時代の土器が山王新田から出土されている。AD500 年頃、岡は大和朝廷の領域となる。
寛平９年(897)、平一族により壮大な荘園を広げる、岡は相馬の東端に位置した陸地で戦略拠点であった。
承平５年(935)、平將門は「岡城朝日御殿」を築く、2 月に「承平天慶(將門)の乱」勃発。
香取の海は、龍ヶ崎や江戸崎、印旛や成田などの対岸で囲まれた灘であり、敵船の攻撃に備える必要上、岡は重要なところでした。

岡は、將門によって朝日出城を建てたのではないだろうか、將門没後「都」から逃げてきた家臣一族は後世に、遁甲としての社を大日後に建立し、人々が近付けないように図り、近寄りがたい所として他国の侵略から守るため、又、平將門の末裔の身分を隠す為に、怨霊説を広げ近寄りがたい所として「岡不知」としたのではないでしょうか。
以上のごとく「不知」の意味は、人を寄せ付けたくない所と言えないでしょうか。

明治時代の仏嶋山古墳発掘とたたり

「仏島」は岡台地の大日山を中心とした岡・和田・配松・神住地区を含めて中世に呼称された集落地で、俗称「岡不知」といわれた所の傾斜丘陵地の土をくずし、この土を運んで岡堰の築堤と道路改修の工事で明治 28 年に古墳が発掘されました。

この岡堰用水の工事を行っていた時に、古墳を真正面から掘削していた人夫たちは怨霊にとりつかれます。

古墳と言う神聖な地を開拓したため、事故が多発し「岡不知のたたり」と言われ、また古墳調査も必要なため、工事は中断されました。用水工事は昭和８年になって、やっと完成しました。　　【藤代町史】より

延命寺古墳出土の埴輪は、現在東京国立博物館に保管されています。

ざらざらの肌、遠くを見つめる目。あどけない顔だちに悲しみがにじむ。死者の霊を慰めた古代の人々の生活の血が埴輪の中に見えます。

岡に在住されている人の話では、將門の重臣の一人がこの地に居住して、神社を建て神官として定住したと話してくれました。先祖は大日橋の近くに住んたそうで、広い敷地は大日山に及んでおり山懐には、先代の時代まで「熊野神社」があったという話を聞いています。

九曜紋鬼瓦の旧家の佇まいで、思わず「間違えない」思わされました。確かにこの岡には、九曜紋の鬼瓦が多い。

岡は、下総国佐倉と常陸国北条を結ぶ街道筋になります、文巻川(小貝川)を渡る「渡し場」となり発展します。

江戸時代からの岡は堰として水田を潤す役割を担い相馬二万石という大穀倉地帯の源となりました。

渡し場は下流の山王に統括され、山王は渡し場の宿場として取手、戸頭、藤代、戸田井と共に賑わいました。

取手市史民俗編によると「岡部落と寺田部落は水田の水争いが昔から絶えなかった」という聞きとり文がある。

荒廃寸前の薬師堂、旧藤代町教育委員会標識「岡台地と平將門」1995 年２月設置、

「岡台地と平將門」の説明板がある。用水掘り(表郷用水)沿いに進むと薬師堂と墓地があり、墓地内には大正 12 年の改葬記念碑があり六地蔵が残る、佛嶋山華蔵院金仙寺奥ノ院跡で約二百年前に岡から山王へ移っている。

「この岡台地は一望千里と言われる平坦な水田地帯の広がる町にあって、唯一の台地で古い歴史を秘めたところでもある。特に承平の乱(935～940)を起した平將門にまつわる史蹟が散在し伝説が語継がれてきた。

『將門にまつわる史蹟』として大日山古墳、朝日御殿跡、延命寺、仏烏山古墳が存在する。

野仏と舟形地蔵、藤代町指定文化財でしたが、平成 17 年取手市合併により指定解除されました。

水路脇に石仏がある道を、奥へ入ると舟形の光背を背負った大きい地蔵と野仏(のぼとけ)がある。

地蔵菩薩は舟形光背 249Cm、立像 179Cm。寛文６年(1666)の建立。順海、祐海、順永の各権大僧都の名が刻まれている。
野仏は光背 78Cm、座像 55Cm。延命寺法印順海、延宝８年(1680)とある。この地蔵は舟形地蔵の裏にあるので「裏地蔵」とも呼ばれている。

⑤ **仏嶋山古墳**(ぶっとうやまこふん)、平將門の祠がある。
　古墳は以前は大きく、高さもあったが、学校用地の造成、岡堰の築堤などに土砂が採取され小さくなった。
古墳の頂きの祠は將門神社である。

東京国立博物館平成館企画展示、特集陳列「東京国立博物館コレクションの保存と修理」期間 2010/03/16～05/09
土師器(はじき、素焼きの土器「かわらけ」の前世の食器や埴輪)坏 1個 茨城県取手市岡字大日仏島出土 古墳時代・6 世紀 根本安雄氏寄贈　J-22703 考古資料相互活用経費による修理、他 20 品展示されました。

⑥ **大日山古墳**、
　桔梗御前の舘址とも伝わる伝説が残っている、岡神社がある。昭和 14 年２月茨城県指定史跡。
大日古墳祭礼記念碑（題額は昭和 14 年５月茨城県知事吉永時次書）より
大日山古墳は神々の宿る地として太古より人々に敬われて現在に至り建てられたのが岡神社である。
この辺り一帯の広場を朝日御殿跡といい、將門の愛妾桔梗御前の御殿の跡と伝えられている。岡神社の北東に当る山林は岡不知とも云われ、將門の墳として長らく語り継がれてきた。
神社の南にある桔梗田は桔梗水歿の沼跡といわれ現在に到るもなお岡部落一同が協同で耕作している。この様に岡の地は將門ゆかりの地として千有余年の間広く將門信仰の対象となってきた。將門が世に正しく評価されつつある昭和 50 年岡部落一同社殿内外を整備し同年 11 月盛大に岡神社の祭礼を行った。」と伝わる。
　この古墳は岡台地の先端に造営された古墳で、高さ 2.8m、底径 18m で副葬品は不明である。
かつてこの附近から各種玉類、鉄やじり等が発見されたが、築造年代は古墳時代後期でないかと言われている。
中・近世になって大日信仰が盛んになるとこの墳丘に種々の石碑や石造仏が建てられたので、大日山の名はそれによって付けられたものであろう。現在墳丘上に岡神社が建立されている。
岡神社、岡地区の守り神で熊野権現、八幡、鹿島、天神、稲荷の各社を合祀する。多数の石塔、石碑、祠、灯篭などがある。参道の階段下に「新四国・・」の大師道の道標がある、高須大師霊場のものである。
郷州街道、現在名は県道 251 号線(藤代－守谷)、旧名藤代坂戸井岩井線
　岡地域センター前から山に入ると、途中に右手から来る山道がある。將門の時代から守谷城とこの地（大日山）を結んだ街道で、「郷州街道」と呼ばれていた。岡台地は標高 28m だが、平地はかつては竜ヶ崎の方向に広がった海であり、ここが郷州街道の終点で、この先東は船便となり、將門は戦略上の重要な場所としてこの地を押えたものと思われる。利根川の東遷の後は「銚子街道」となり千葉県銚子まで延伸された様です。

昭和 40 年頃の岡堰

昭和 18 年飯田三左衛門家の元藤代本陣、銚子屋

水戸黄門は水戸街道での旅は一度しかなく、藤代本陣の利用記録が残っている。銚子屋には正岡子規が宿泊した。
旅籠屋の　門を出づれば　春の雨　　水戸紀行より、菊池謙二郎を訪れる旅で一句を残している。

⑦　**朝日御殿と桔梗田(沼)**

平将門が７人の影武者に囲まれて朝日を拝んでいた。討伐使の藤原秀郷がこれを聞きつけ、(秀郷の妹という説もある）桔梗御前を「將門と和睦する」とだまして將門本人を教わり、こめかみが弱点であることを聞き出した。
將門は、天慶三年(939)二月十四日、將門は茨城県猿島町幸嶋において、矢で討ち死にした。真相を知った桔梗は岡神社下の沼に身を沈めた。この沼はのちに田となり「桔梗田」と呼ばれたが、ここを耕作する農家の娘は嫁に行けないことが続き、現在は集落の共有地になったことを案内板は知らせています。
岡神社の狭い階段を下りて右に出て更に右手の先の道を少し行き、左側の畦道に入ると、藤代町の案内板が相野谷川沿いにある、この葦の茂るところが桔梗田です。写真頁を参照下さい。
取手市米野井に**桔梗塚**がある。市教育委員会の説明版に以下のごとく記されている。
相馬日記に「米野井の桔梗が原というは將門が妾桔梗の御前というが殺されけるところにてその墳あり。今も桔梗はありながら花咲くことなきは、この御前がうらみによれるなりといへり。」
竜禅寺に伝わる話では桔梗姫は大須賀庄司武彦の娘で將門の間に三人の子をもうけ、薙刀(なぎなた)の名人であったが、將門の戦勝を三仏堂に祈願しての帰路、この地で敵将秀郷に討たれという。
また一説には將門には常に七人の影武者がそばにいた。桔梗は騙されて、本物は「こめかみ」が動くことを敵に教えたので、將門をしとめることが出来た、その後秀郷は桔梗をも口塞ぎのため殺したという。
一説には將門の討ち死に後に桔梗はここまで逃れてきて追っ手の手に掛かり亡くなったと伝えられる。

⑧　**相野谷川、**相野谷川は、一級河川ですが取手市内だけ流れ利根川に合流する全長５Km 程の一級河川です。
川の上流彼方に［取手市立特別養護老人ホームふれあいの郷」と高井小学校が見える、高井小学校は取手市内では古く大正時代に開校していますが、現在の位置とは違い下高井の水戸納豆の工場「大里」の近くにあった。

⑨　**大山城址**

新取手は昭和 40 年代迄「寺田字後山(うしろやま)」や「寺田字大山」と字名が付いていたが、常総線新取手駅が、昭和 43 年４月に開業されてからは、住所も駅名の「新取手」と変わりました。
この住宅団地の北外れに大山城址があります。現在、野草愛好家の海老原様が農業を営みながら、お住まいになられています。大山城があったとされる岬のような地形の先には、南北に流れる相野谷川が流れ、川を挟み向かい側には、岡神社のある丘となっています。相野谷川沿いをよく見ると、畑の一角に立て看板があるのですが、先に記した桔梗田の説明板です。朝日御殿、桔梗田、大山城址は、僅かな距離に一直線上の地に位置しています。

大山城主久寺豊後守(くじぶんごのかみ)、
寺田にあり「承平天慶(じょうへいてんぎょう)の乱(930～940)」の当時「久寺豊後守」という、近郷きっての武将が居城して平將門の家臣として、弟の丹後と大山城を固めていたが、天慶三年(940)に將門が敗死したことを知り、征討軍が大挙押しよせる、を虞って城を捨て南方に逃れました。
後に兄の豊後は、我孫子市久寺家(現在地名)にて、弟丹後は我孫子市柴崎に隠れて帰農したという。
久寺家の大炊氏宅(久寺豊後守子孫)には、將門に関する天慶三年の位牌、及び違物の頚(くびき)天神という天神社があるということです。
久寺豊後守は、通称を左馬之助と言っていたが、これが天慶三年に逃れてこの地に住むと、地名を久寺家と称するようになり、鎮守として日本武尊を祀り大鷲(「おおとり」ではなく「おおわし」)神社を祀ったといわれている。
よって、大炊氏の威勢の大なることをみることが出来、江戸時代同地方の名主に就任したそうです。
久寺豊後守の弟丹後も兄と同じように、我孫子柴崎に逃れ山賊のような暮らしをしていたようでしたが、後に「大

井」と名のり帰農して現在に至っています。
このように、取手市新取手と我孫子市久寺家が歴史上で関連していた事は、歴史探索の面白さとも思えます。

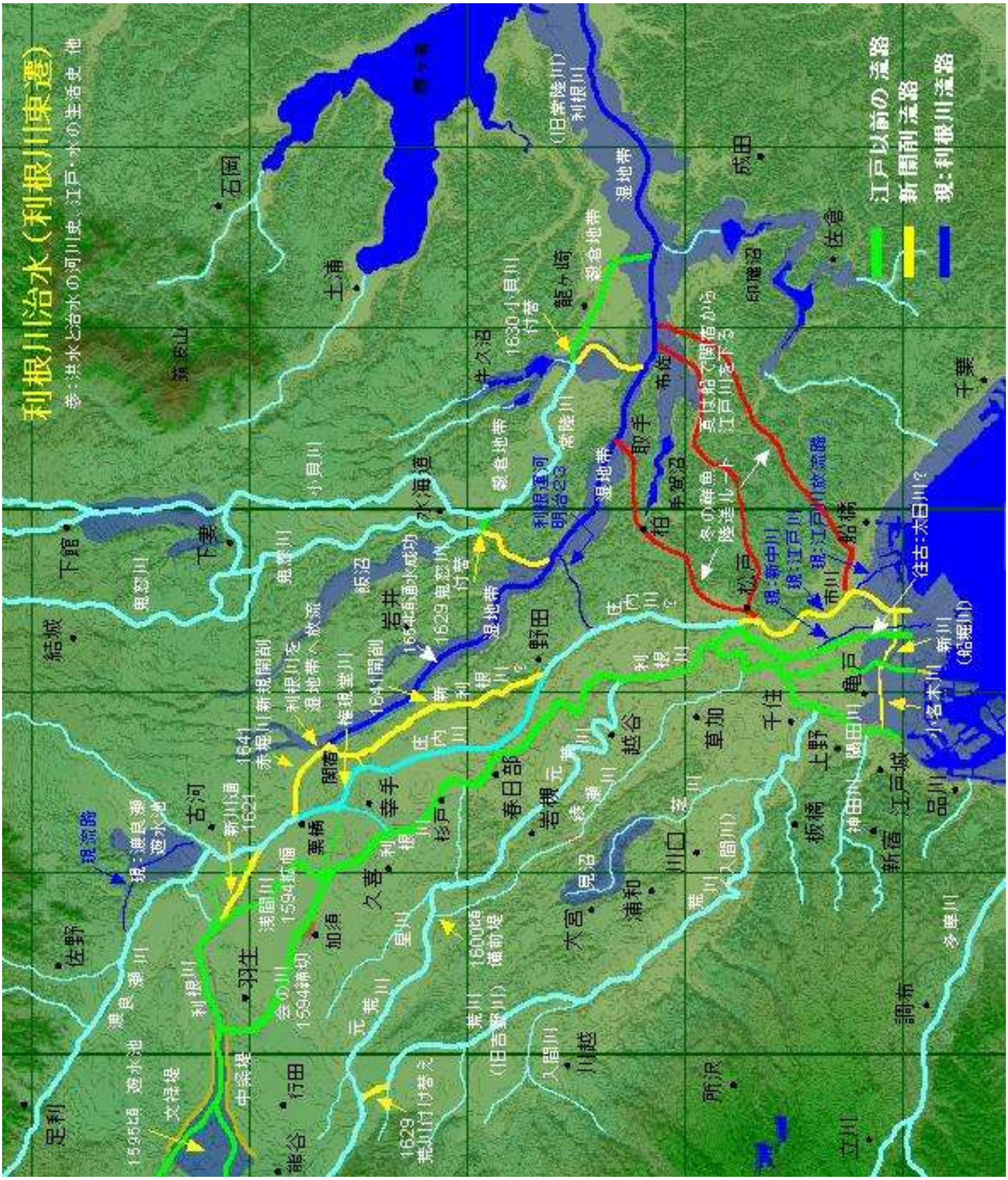
柴崎様とは將門の重臣柴崎左馬督(さまのかみ)のことで、その墓所が柴崎村の集落の中央部に残されている。村人たちはこの墓所を柴崎様と敬愛の念をこめて呼びならわしている。
瓦ぶきの屋根をもつ小さい建物の中に塚（宝篭印塔）があり、花が供えられている。
また位牌が立っており、「天慶二年九月十七日　真相院殿地源庭芳大居士」の法名が書かれている。
柴崎左馬督は柴崎神社の社殿を修築したともいう。左馬督はここで首を切られたとの伝説がある。なぜ、誰に切られたかなど、それ以上詳しくは不明。
天慶二年(932)は將門が一族と合戦に及ぶ三年も前であり、なぜ殺されたかについては、大いに疑問の残るところである。いずれにしても、千年以上このように丁重に守り継がれていることを、おろそかに考えることはできない。

柴崎天満宮
大井天満宮、また天満宮ともいう。国道６号と船取街道の分岐、我孫子警察署の隣に立っている。
天満宮を所有する大井家（当主節さんは亡くなった）は將門の重臣久寺豊後（取手寺田の大山城主）の弟で、将門戦死の後しばらくしてここ柴崎に住み、農を営んだ。
大井家で「祝鎮座千五拾年記念柴崎天満宮　平成三年正月　大井氏」の文字と梅の紋所を染め抜いた手拭をいただいた。これを見てよく考えると、平成三年(1991)の 1050 年前は 941 年、これは天慶四年すなわち將門が戦死した翌年にあたる。これは何を意味するか。將門戦死の翌年は、將門の一周忌にあたる。恐らく將門の残党狩りがまだきびしく行われていたであろう。そんな中でも將門を敬愛する大井氏の一族は、ひそかに一周忌を取り行ったであろう。そして將門を神としてまつるために、將門が尊崇した菅原道真公を天満宮に祀ったのではないか。
神社名は天満宮だが、社前に毎年立てる幟には「須賀原大神」と書かれている。
天神様として菅原道真公を祀ることにより、実は將門公を祀りついで来たということができよう。
この天満宮はなぜか首天神とも呼ばれ、大井家では「正月の供え餅が首に見えるから」として、今でも供え餅は作らない。幟は大井家の分家８軒が２軒ずつ交代で、４年に一度当番が立てることになっている。
例年１月 25 日ころ社殿を開き、女性が接待することになっており、神酒を参詣の人に注ぎ、祭礼が行われる。
平成三年には幟２本が新調され、高野山の松園琉紅氏の筆で文字が書かれた。境内の梅の木の横に立てられる。
年によって雪の降る日にあたったこともあるとのこと。また年によって梅の一輪の花が見られるかもしれず、何とも古い日本の美しい一コマを見る思いがする。

⑩　**將門の井戸**、大山の豪農で庭に井戸が残る、將門の母が使っていたと云われＮＨＫも取材に来たという。
山王、小貝川の岡堰下流に二三成橋(ふみなりばし)があります、小貝川を渡る幹線道路の重要架橋で、この辺りを山王といいます。岡堰は小貝川の渡しがあり栄えていましたが、山王村は水戸街道枝道としての役割を担っていました、また小貝川の渡しで栄えたところです。

山王の出身で、**俳人高野素十**がいました、法医学教室に勤務していた大正７年(1923)水原秋桜子(しゅうおうし)のすすめで俳句を始め、のち高浜虚子に師事し、水原秋櫻子と共に「ホトトギス４Ｓ」の一人といわれ人気俳人であった高野素十(すじゅう)の故郷であり、帰省するたびに岡堰に名句を残していました。
水喧嘩　徳川の遠に　さかのぼる　　高野素十。　この句のように、岡村と寺田村の水争いの歴史は古くからあったようで、渇水時は生死を掛けて争ったそうです。平成 17 年藤代と取手の合併は、水争いがなくなった今、実現したのではないのでしょうか。　故郷の　喜雨(きう、夏の土用の頃の雨)の山王　村役場　　素十

利根川の東遷と小貝川、　　　　　　　　　　　文字が小さいので地図を横むきに拡大印刷しました、ご容赦ください。



鬼怒川と小貝川下流の河川流の付替えの図。「庄内川？」と記されているが、現在名は「江戸川」です。

　元和7年(1621)、利根川と渡良瀬川を新川通で通水、寛永 13 年(1641)にやっと赤堀川開削が成功する。

寛永6年(1629)、鬼怒川と小貝川の分離と付替え、寛永7年小貝川の付替えが完了した。

寛永 18 年(1641)家光、権現堂川を拡幅、関宿～野田間に利根川のバイパス流路を開削する。

栗橋や五霞村付近、庄内川流域の洪水防止目的と思われ、この時点で利根川の東遷は一段落となります。農耕用の土地の安定化が目的の治水はこの時点で完了したわけです。

正保図（1643～1647）ではこのバイパスに江戸川の呼称はなく、元禄図でこの部分を利根川と書いています。

隅田川～利根川の間の土地が武蔵に編入される。万治2年(1659)に隅田川に架橋された大橋の俗称が両国橋ですから、一般の感覚では隅田川の東はまだ下総の国だったのでしょう。両国とは武蔵国と下総国の両方の国に架かる橋「両国橋」から、両国地名となる。

明治以降の東遷工事、

明治 4 年(1871)、赤堀川のバイパスが完成、赤堀川の通水力が拡大した。明治6年、現在の鹿島港付近への放水路が完成。しかし暴風雨で河口が閉塞し利根川下流域の洪水増大。翌年、オランダ人技術者による利根川復興が開始される。

明治 10 年、足尾銅山が本格採掘開始。翌年、渡良瀬川洪水によって鉱毒被害が下流の農作物にまで及ぶ。利根川、渡良瀬川の洪水防止策として江戸川へより多く放流する提案がなされたが明治政府は実行せず。江戸川河口には行徳の塩田があり、ここに鉱毒被害の及ぶことを危惧したためともいわれます。20 世紀初頭には日本の銅産出量の 1/4 を担うほどの大鉱山に成長した。

しかし、急激な鉱山開発は足尾鉱毒事件に見られる公害を引き起こし、下流域の住民を苦しめることとなった。これを見かねた田中正造は立ち上がり、この問題に対し懸命に取り組んだ。昭和 48 年 2 月 28 日やっと操業を停止し閉山した。

文巻川

小貝川下流域は、1630 年に付替えられました、旧河川を昭和 40 年頃まで下流域(藤代、龍ヶ崎、布川、文間)の人は文巻川と言い、その名は、旧国道 6 号に「文巻橋」として残っている。

小貝川、別字記載の河川名　小飼川、蚕養川、など

栃木県那須烏山市曲畑の小貝ヶ池に源を発し南へ流れる。五行川(栃木県氏家が源で茨城県下館市では勤行川と呼んでいる、大谷川(だいやがわ、湯元中禅寺湖が源の有名河川)等の支流を合わせ、茨城県取手市、北相馬郡利根町と千葉県我孫子市の境で利根川へ合流する。全長 111.8km で、利根川の支流中で第 2 位の長さを誇る、利根川支流最長は鬼怒川です、

写真は小貝川を渡る水戸街道(旧国道 6 号)の文巻橋。

伊奈家三代に渡る工事の遍歴

年　代	出　来　事
天正 18 年 1590	家康は伊奈忠次を関東郡代に任じ、関東周辺の河川改修工事にあたらせた。以後、忠治、忠克と伊奈家 3 代により、利根川の銚子への通水が行われていく。
文禄 3 年 1594	忍城の城主であった松平忠吉が家来の小笠原三郎左衛門に命じたことにより、会の川の締め切り工事が行われた。当時、利根川は浅間川と会の川に分流し、今の羽生市付近は複雑に水路が巡っていたが、浅間川が主流となった。また、これと並行して行われた太日川下流の行徳塩田と隅田川と結ぶための水路（現在の小名木川・新川）開削工事も利根川東遷事業に含める場合もある。
慶長 5 年	(1600) 荒川は備前堤により下流を締切り綾瀬川として分離、星川に通水し今の元荒川に流路を変更。
元和 7 年 1621	新川通の開削工事と権現堂川の拡幅が行われる。これにより、利根川と渡良瀬川が合流し、下流域はおおよそ現在の江戸川に沿って江戸湾へと流れ出るようになる。 同年、赤堀川の掘削も始まる。赤堀川は水運に利用するため鬼怒川の支流である常陸川と利根川を繋ぐ水路を担う予定であった。しかし、赤堀川は台地を掘削するために難工事となり、1635 年の工事も含めて、通水には二度失敗している。
寛永 6 年 1629	鬼怒川と小貝川の分流・付け替え工事と荒川の付け替え工事が行われた。 鬼怒川は 3 ヶ所にわたり台地を掘削するという難工事を敢行し、香取海への合流点を約 30km 上流に移動した。これと同時に、布佐と布川間に狭窄部をつくり、その上流に小貝川を合流させる付け替え工事を行っている。 荒川は熊谷市久下で締め切られて和田吉野川より入間川に接続、荒川下流域の洪水を防止また利根川より分離。以降、入間川下流は荒川に、荒川下流は元荒川に名称が変更される。

寛永 18 年 1641	関宿・野田間に現在の江戸川上流部が開削され、庄内古川として旧流路を締め切り赤堀川以外の水路が完成をみる。
承応３年 1654	掘削開始から 33 年後 3 度目の赤堀川掘削工事により、ようやく赤堀川に水が流れる（それでも利根川の洪水を流下させるには川幅は狭い)。
寛文５年 1665	境町・関宿間に江戸川を移し権現堂川を締め切る。これにより霞ヶ浦・銚子から常陸川・関宿・江戸川を経由し、江戸へといたる水運の大動脈が完成することになり、事業は一段落する。
天明３年 1783	8 月 5 日に浅間山が大噴火し、火砕流と火砕泥流、および吾妻川と利根川の洪水が発生し死者 1,000 人超の大災害が起きた。当時の土木技術では大規模な浚渫などの抜本的な対策を取ることはできなかったため、江戸幕府は当面の対策として江戸川への流入量の制限や赤堀川の拡幅などを行う。 これは結果として霞ヶ浦をふくむ利根川下流域の水害を深刻化させることとなった。 パナマ運河工事の土量を越える大規模な浚渫が実施され、この浅間山噴火の影響が利根川全域から取り除かれたのは明治後期である。

利根川改修の影響

これらの一連の河川改修により、東北から江戸への水運には、利根川を使うことで危険な鹿島灘の通過や房総半島の迂回をする必要が無くなり、利根川は大消費地江戸と北関東や東北とを結ぶ物流路として発展した。
この水運路は鉄道網が整備される明治前半までは流通幹線として機能していく。
また、この河川改修によって江戸周辺や武蔵国、常陸国、下総国などを中心として新田開発が進み、耕地面積が大幅に増加している。しかし、1783 年の浅間山噴火や明治期の足尾鉱毒事件などを契機に、手賀沼や印旛沼、霞ヶ浦などをふくむ利根川下流域では排水不良によって洪水の激化を招く事となった。

このことが、江戸時代以降、現在に至るまで利根川下流域の治水対策を強化していく事情へとつながり、その対策として行われた大規模な河床の浚渫は、海水の溯上を容易にして下流部では塩害が激化、戦後における大規模な対策事業へとつながることになり、現在でも継続されています。

伊奈備前守忠次の銅像

千波湖の増水が下市に被害を与えたため、水戸初代藩主頼房の時の慶長 15 年(1610)徳川家康の家臣で関東郡代の伊奈備前守忠次により造られた治水と利水を兼ねた灌漑用水です。現在新水戸八景に選定され市民の憩いの場となっています。
初代、伊奈忠次（1590 年 - 1610 年）関東代官頭
二代、伊奈忠政（1610 年 - 1618 年）関東代官頭、若くして亡くなる
三代、伊奈忠治（1618 年 - 1653 年）これ以降関東郡代
四代、伊奈忠克（1653 年 - 1665 年）
忠次は、「武蔵国足立郡伊奈」と部落名として、現在は「埼玉県伊奈町」として町名となっている。更に、伊奈町音頭は「ハァ～伊奈の殿様忠次公の（ヤサヨイヤサ)」と歌い出される。

埼玉県北足立郡伊奈町大字小室字丸山に伊奈屋敷跡があります。
忠次は 61 歳で没し、墓所は埼玉県鴻巣市の勝願寺に眠っています。
子の忠治は、「つくばみらい市伊奈」として今も地名が残っている。

【参考資料】、大山城址、「取手町郷土史資料集第二集第一章近世、一、大山城跡、総代八幡社、大鹿城址のこと（1）大山城跡」より。藤代町史暮らし編、高須霊場関係「ふじしろの石仏」藤代町教育委員会編集より。

新四国相馬霊場 88 ヶ所を巡る会、岡堰と大日山仏島山古墳、光音子　2011/03/05
2014/06/05　追記

現在の久寺家と柴崎及び柴崎台の位置

我孫子市久寺家は、柏市布施に隣接しています。現在「つくし野」と呼ばれている住所地も、久寺家でした。
我孫子市柴崎は、北側に国道６号があり、船橋市と取手市を結ぶ県道「船取線」が合流し、更に「旧水戸街道」が我孫子警察署の前で合流します。我孫子警察署は、昭和 58 年に旧我孫子第３小学校の跡地に建てられました。
船取線の分岐地点に「天満宮」の社が建立されています。本文をご参照下さい。

本文２頁目上段の「取手市青柳にある本願寺も、柏市布施から移ったといい伝えもある」については、「新四国相馬霊場八十八ヶ所を巡る会」のホームページ、「相馬霊場開催年間予定」の「西暦年号奇数年３月」の資料 10 頁をご参照ください。 http://www3.ocn.ne.jp/~kumaken/stacks/g3-fusebenten.pdf

また、柴崎には古文書の教材にもなっています、**柴崎村たい「女松ヶ崎駈入」**の事件も紹介しています。
江戸時代の離婚で、女性側からの申しだては困難であった様子が記されており、庶民の生活記録としては大変貴重な古文書であると云われています。現代文で紹介しています。

「あけぼの」周辺ＭＡＰ